

## コラム 災害から資料をまもるために我々にできること

2018年7月、100年に一度と言われるほどの大雨が、私の故郷である岡山県を襲った。のちに「西日本豪雨」と呼ばれた水害である。この日、岡山県倉敷市真備町では近くの小田川の堤防が3カ所決壊。4千棟以上が浸水するという被害を受けた。もともと岡山県は「晴れの国・岡山」というキャッチフレーズが付くほど降水量が少なく、雨の降らない地域であった。しかし、西日本豪雨によって真備町は水の底に沈み、多くの尊い命を失った。翌8月に真備町を訪れたが、一面砂ぼこりが舞い道路も建物も泥だらけであちこちに流されたモノが散乱していた。私は初めて故郷の変わり果てた姿を目にした。この事をきっかけに、私の中で災害に対する考え方が大きく変わったように思う。私は生まれてから今まで大きな自然災害に遭ったことがなかったため、災害というものをどこか遠い出来事のように捉えていたのかもしれない。しかし、自然災害はいつ起きて襲われてもおかしくないのである。「明日は我が身」と思い備えることが重要だ。

地震、津波、火災等々、これらは人の命だけでなく住居や畑、大切にしていたモノまでも奪い去っていく。モノには人それぞれに「想い」という名の価値があり、その価値の高さは計り知れない。災害からその想いを守る為に、私たちに出来ることはないのか。なす術なく奪われるしかないのか。自分なりの答えが欲しくて、宮崎県（宮崎市みやざきアートセンター・日向市美々津重要伝統的建造物群保存地区）と鹿児島県（出水市麓重要伝統的建造物群保存地区）でそれぞれ行われた文化財レスキューのワークショップに参加した。

ここでは、実際に災害が起きたことを想定して、時間経過とともに自分たちに何が出来るかの行動をシミュレーションした。そこで私は多くのことを学んだ。まず、初めに何よりも重要なのは「人命優先」であること。災害発生時の人命救助は72時間が経過すると生存率が急激に低下するとされている。迫りくる生死を分けるタイムリミットの中、より多くの命を救おうと懸命な救助活動が行われている。どの自治体も手一杯で対応に追われている状況であるため、それが落ち着くまで私たちは現場に入ることは許されない。ニュースやネットで被害情報を集めつつ、多くの命が救われるようにと願い備える時間となる。そして、救助活動が落ち着いた頃、文化財レスキューの本部が本格的に動き出す。その時に重要となるのは集めた情報を整理し、予測可能なあらゆる事態に対応できるようにすることだ。資料の運搬経路や仮置き場、資料レスキューに参加する人員の確保等々、溢れ返り錯綜する情報を的確に処理し、各自治体と専門家の支援団体が連携することが必要不可欠である。

私はワークショップに参加してみて、一人では何もできないが大勢の人が協力し連携することで成し遂げられるものがあると知った。中には資料をレスキューするという言葉聞いて、「ただのモノなのに救わなくてはならないのか」と思う人もいるだろう。私はたとえ歴史的価値がないモノだとしても、それを大切にしていた人が居るならば救うべきだと考える。

他の人からはゴミに見えたとしても、その人にとっては思い入れのある大切な資料。それを救い出し持ち主の元へ返してあげること、少しでも災害で病んだ心の傷が癒えるのではないかな。災害で何もかも奪われどん底に落ちたとき、そこから再び立ち上がり前を向くには時間がかかる。その支えにほんの少しでもなるなら資料を救うことには意味があると私は思う。

（中島 智子）